

STUDIES ON THE ACHIEVEMENT MOTIVE OF
NURSING STUDENT IN COLLEGE : Factorial
structures and their consciousness

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 敏子, 松永, 保子, 浅本, 憲, 松田, 好美, 内海, 滉, MORITA, Toshiko, MATSUNAGA, Yasuko, ASAMOTO, Ken, MATSUDA, Yoshimi, UTSUMI, Ko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/981

看護大学生の達成動機に関する研究

—因子構造とその因子を規定する要因の検討—

森田敏子*, 松永保子*, 浅本 憲**, 松田好美**, 内海 滉***

看護学科*臨床看護学講座, 医学科**解剖学講座

(平成12年8月25日受理)

STUDIES ON THE ACHIEVEMENT MOTIVE
OF NURSING STUDENT IN COLLEGE

—Factorial structures and their consciousness—

Toshiko MORITA*, Yasuko MATSUNAGA*, Ken ASAMOTO**, Yoshimi MATSUDA**

and Ko UTSUMI***

Department of Clinical Nursing, School of Nursing**Department of Anatomy, School of Medicine*

Abstract : A total of two hundred twenty six students who attended to four classes (freshman, sophomore, junior, and senior' s class) of the nursing college, was asked to answer the questionnaire of the "Achievement Motive test" . Employing the factor analysis with the Varimax rotation, comparison of the four groups of the students' class was performed, discovering the relationship of the achievement motives to the consciousness forming the factorial structures. The factorial structures were characteristic of each class group, such as the factors regarding to the fulfillment of the personality development as well as the social achievement, and/or sometimes the avoid of the success. For the formation of the structures were contributed many of the consciousnesses such as a pride as a nurse, significance of the works, whether the work is noble and holy, or the work is possible to continue to the lifelong period, or with human development, contributing to the society etc.,

Key Words : Achievement Motive, nursing student, nursing education, personal characteristics

*広島県立保健福祉大学 Hiroshima Prefectural College of Health Science

**愛知県立看護大学 Aichi Prefectural College of Nursing & Health

***千葉大学 Chiba University

はじめに

社会的動機の一つである達成動機概念には、社会的・文化的に価値があるとされるものを達成することが大きな要素であるとされ、社会と個人の関係に焦点が当てられている(1-3)。社会的動機として達成動機を最初に取りあげたマーレイ(Murray, H.A)は、達成動機を「むずかしいことを成し遂げること。……自己を克服すること。他人と競争し他人をしのぐこと。才能をうまく使って自尊心を高めること。」と定義している(1)。また、林は「高い基準に対して自己の力も発揮して障害に打ち克ち、できるだけよくその目標を成し遂げようとする動機または欲求」と定義している(4)。さらに、宮本は「その文化において優れた目標であるとされる事柄に対し、卓越した水準でそれを成し遂げようとする意欲」(5)と定義している。

このように定義されている達成動機は主観的なものであり、客観的に測定することは困難であると考えられていた。しかし、マクレランド(McClelland, D.C)(6)やアトキンソン(Atkinson, J.W)(7-9)あるいはベンディング(Bending, A.W)(10)らによって測定用具の開発が進められ、次第に客観的な測定が可能となってきた(11-12)。本邦では宮本や藤原、堀野、山内らによって達成動機に関する研究がなされ(2-3, 5, 13-18)、さらにベンディングが開発した測定用具を堀野・森らが翻訳し、その尺度の修正がなされ、質問紙調査による達成動機尺度が開発され、妥当性と信頼性が検証されてきた(1-2)。

看護学生は看護職になるという目的意識をもって入学し、勉学に励んでいることから、「看護職になる」という達成動機は高いものと推察される。また、達成動機は一般的に「自己のすぐれた基準をもとに物事をやり遂げようとする動機」とされることから、看護職になることを目指す看護学生の達成動機とそれに関与する要因を明らかにすることは、看護教育の改善の基礎資料となると考えられる。最近ではこの観点から看護学生を対象とした達成動機に関する研究がなされている(19-21)。我々は昨年F大学の看護学生3学年を対象に達成動機に関する調査研究を行った(22)。これによると、看護大学生の達成動機として4因子が抽出され、個人の積極的価値に基づく「個人的達成欲求」と、社会的・文化的価値のあるものを達成するという「社会的達成欲求」の2つ視点があることが確認された。また、達成動機を規定する要因として、看護学生としての誇りを持つこと、看護職に対するやりがい意識を持つこと、看護職に対する価値づけがあること、看護職を通して人間的に成長すること、一生役立つ知識や技術を修得することなどの意識が重要な要素であることが確認された。さらに、看護教育においては、結果のみに焦点をあてるのではなく、看護を学ぶプロセスを尊重するような教育的配慮が重要であることが示唆された。しかし、これらの結論は3学年までの結果から導きだされたものであった。F大学の学年進行が進み4学年がそろったことから、本研究は、看護大学生である4学年を対象として達成動機に関する調査を再度行うものである。

したがって本研究の目的は、1) 看護学生の達成動機の因子構造を確認することにより、看護学生の達成動機の学年別の特徴を解明すること、2) 達成動機の形成を規定する要因と学生

看護大学生の達成動機に関する研究

の意識や態度との関係を明らかにし、看護教育改善のための基礎資料を得ることである。

I. 研究方法

1. 研究対象及び調査時期

2000年4月にF大学に在学していた看護学生に、研究の主旨を説明し協力を求めた。さらに、この調査は研究の目的にのみ使用するものであり得られたデータは統計的に処理し、個人的な情報が学業成績や評価に影響したり、外部に漏れたりしないことを説明して同意を得た。

この結果、看護学生236名のうち調査の主旨に賛同が得られた226名95.8%（1学年56名93.3%、2学年55名93.2%、3学年58名98.3%、4学年57名98.3%）が研究対象となった。調査は2000年5月下旬から6月上旬にかけて、それぞれの学年の集合的機会を利用して行った。

なお、F大学には、編入生が在籍しているが、一般入学生とは背景が異なるため、今回の結果からは除外した。

2. 調査方法

達成動機の質問紙はベンディングが開発し、堀野・森らが修正した23項目で構成されている双極7件法の「達成動機調査項目」を用いた（表1）。

達成動機の形成を規定する要因の検討には、“看護学生としての誇り”や“看護職の仕事のやりがい”、“看護職は尊い仕事だと思う”など「看護職への認識」に関する6項目及び“一生役立つ知識・技術を修得する”、“人間的に成長する”、“経済的・精神的に自立する”など「看護の道を選択した理由」に関する9項目で構成した自記式質問紙を用いた。

3. 分析方法

達成動機測定尺度23項目の回答は、7段階に数量化して主成分分析を行い、その後バリマックス回転法による因子分析を行い、各学年の因子構造を比較した。達成動機の形成を規定する要因は、「看護職への認識」と「看護の道を選択した理由」の各項目を肯定的回答と否定的回答の2群に分け、因子得点の群別平均値をt検定し、因子に及ぼす要因として検討した。なお統計処理は、統計パッケージSPSSを用い、有意水準は5%以下とした。

II. 結果

1. 達成動機の因子構造

達成動機測定尺度から各学年ともに4因子が抽出された。各学年の因子構造を因子負荷量表に示した（表2～表5）。クローンバック α 係数は、1学年は第1因子から順に0.78, 0.78, 0.72, 0.72であり、2学年は第1因子から順に0.80, 0.81, 0.77, 0.79, 3学年は0.90, 0.86, 0.80, 0.73, 4学年は0.61, 0.78, 0.69, 0.61であった。

1 学年の因子名は, 第1因子は「21. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」, 「10. 何でも手がけたことは最善をつくしたい」, 「6. ちょっとした工夫をすることが好きだ」などで構成されているため『自己努力最善因子』とし, 第2因子は「22. 世にでて成功したいと強く願っている」, 「20. 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」, 「9. 競争相手に負けるのはくやしい」などで構成されているため『社会成功因子』とした。第3因子は「4. 人と競争することより, 人とくらべることができないようなことをして自分を生かしたい」, 「3. 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」, 「2. ものごとは他の人よ

表 1 達成動機調査項目

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. いつも何か目標を持っていたい2. ものごとは他の人よりうまくやりたい3. 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい4. 人と競争することより, 人とくらべることができないようなことをして自分をいかしたい5. 他人と競争して勝つとうれしい6. ちょっとした工夫をすることが好きだ7. 人に勝つことより, 自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う8. みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい9. 競争相手に負けるのはくやしい10. 何でも手がけたことは最善をつくしたい11. どうしても私は人より優れていたい12. 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う13. 勉強や仕事を努力するのは, 他人に負けないためだ14. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい15. 今の社会では強いものが出世し, 勝ち抜くものだ16. いろいろなことを学んで自分を深めたい17. 就職する職場は, 社会で高く評価される場所を選びたい18. 成功するということは名誉や地位を得ることだ19. 今日一日何をしようかと考えることは楽しい20. 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う21. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う22. 世にでて成功したいと強く願っている23. こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする |
|---|

看護大学生の達成動機に関する研究

りうまくやりたい」などで構成されているが、全て負の値であったため『没個性因子』とした。第4因子は「23. こういうことがしたいなあと考えたとわくわくする」, 「19. 今日一日何をしようかと考えることは楽しい」, 「13. 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けないためだ」などで構成されているが、正の値と負の値が混在しているため『自己楽しみ因子』とした。累積寄与率は53.7%であった。

表 2 達成動機因子負荷量表：1学年

項目	1f	2f	3f	4f	因子名
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	0.78	0.08	-0.04	0.22	自己 努力 最善 因子
10 何でも手がけたことは最善をつくしたい	0.76	0.21	-0.12	-0.06	
6 ちょっとした工夫をすることが好きだ	0.60	-0.01	-0.48	-0.15	
1 いつも何か目標を持っていたい	0.55	-0.12	0.01	0.08	
8 みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい	0.53	0.27	-0.18	-0.01	
7 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う	0.52	-0.45	-0.10	0.14	
14 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい	0.50	-0.29	0.06	0.13	
16 いろいろなことを学んで自分を深めたい	0.50	-0.04	-0.29	0.27	
22 世にでて成功したいと強く願っている	0.12	0.77	0.07	-0.05	社会 成功 因子
20 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う	0.01	0.72	-0.02	0.16	
9 競争相手に負けるのはくやしい	0.25	0.65	-0.31	-0.12	
17 就職する職場は、社会で高く評価される場所を選びたい	-0.09	0.59	0.10	-0.02	
5 他人と競争して勝つとうれしい	0.19	0.56	-0.06	-0.34	
11 どうしても私は人より優れていたい	-0.22	0.55	-0.41	-0.07	
18 成功するということは名誉や地位を得ることだ	-0.21	0.55	0.19	-0.18	没個性 因子
4 人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自分を生かしたい	0.19	-0.04	-0.80	0.22	
3 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい	0.06	-0.09	-0.76	0.20	
2 ものごとは他の人よりうまくやりたい	-0.09	0.38	-0.63	-0.30	
12 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う	0.42	-0.11	-0.62	-0.05	自己 たのしみ 因子
23 こういうことがしたいなあと考えたとわくわくする	0.22	0.08	-0.27	0.73	
19 今日一日何をしようかと考えることは楽しい	0.32	0.07	-0.13	0.66	
13 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けないためだ	-0.16	0.50	-0.20	-0.62	
15 今の社会では強いものが出世し、勝ち抜くものだ	0.17	0.31	-0.08	-0.55	
寄与率 (%)	20.21	18.81	7.95	6.74	
累積寄与率 (%)	20.21	39.03	46.97	53.71	

2学年の因子名は、第1因子は「18. 成功するという事は名誉や地位を得ることだ」, 「20. 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」, 「15. 今の社会では強いものが出世し、勝ち抜くものだ」などで構成されているため『社会地位評価因子』とした。第2因子は「19. 今日一日何をしようかと考えることは楽しい」, 「23. こういうことがしたいなあと考えたとわくわくする」, 「4. 人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自

表 3 達成動機因子負荷量表：2学年

項 目	1f	2f	3f	4f	
18 成功するという事は名誉や地位を得ることだ	0.81	-0.06	-0.13	-0.22	社会 地位 評価 因子
20 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う	0.69	-0.06	-0.15	-0.52	
15 今の社会では強いものが出世し、勝ち抜くものだ	0.67	0.17	0.06	0.20	
17 就職する職場は、社会で高く評価されるところを選びたい	0.49	0.14	-0.47	-0.15	
22 世にでて成功したいと強く願っている	0.48	0.05	-0.42	-0.55	
19 今日一日何をしようかと考えることは楽しい	0.06	0.73	0.00	0.13	自己 生かし 充実 因子
23 こういうことがしたいなあと考えたとわくわくする	0.29	0.71	-0.02	-0.24	
4 人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自分を生かしたい	-0.16	0.70	-0.12	-0.18	
12 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う	-0.07	0.65	-0.31	-0.43	
14 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい	-0.19	0.53	0.08	-0.44	
16 いろいろなことを学んで自分を深めたい	-0.13	0.51	-0.16	-0.57	
3 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい	0.05	0.25	-0.76	-0.02	平凡 願望 因子
11 どうしても私は人より優れていたい	0.24	-0.10	-0.76	0.06	
2 ものごとは他の人よりうまくやりたい	0.31	-0.07	-0.69	-0.16	
1 いつも何か目標を持っていたい	-0.27	0.02	-0.68	-0.19	
17 就職する職場は、社会で高く評価されるところを選びたい	0.49	0.14	-0.47	-0.15	自己 努力 放棄 因子
10 何でも手がけたことは最善をつくしたい	0.04	0.23	-0.13	-0.80	
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	0.04	0.02	-0.22	-0.63	
6 ちょっとした工夫をすることが好きだ	0.08	0.18	-0.18	-0.58	
16 いろいろなことを学んで自分を深めたい	-0.13	0.51	-0.16	-0.57	
22 世にでて成功したいと強く願っている	0.48	0.05	-0.42	-0.55	
寄 与 率 (%)	27.77	14.24	8.72	6.56	
累 積 寄 与 率 (%)	27.77	42.01	50.73	57.29	

看護大学生の達成動機に関する研究

分を生かしたい」などで構成されているため『自己生かし充実因子』とした。第3因子は「3. 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」、「11. どうしても私は人より優れていたたい」、「2. ものごとは他の人よりうまくやりたい」などで構成されているが、全て負の値を示しているため『平凡願望因子』とし、第4因子は「10. 何でも手がけたことは最善をつくしたい」、「21. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」、「6. ちょっとした工

表 4 達成動機因子負荷量表：3学年

項 目	1f	2f	3f	4f	因子名
18 成功するという事は名誉や地位を得ることだ	0.78	0.19	-0.14	-0.02	社会 成功 因子
22 世にでて成功したいと強く願っている	0.78	0.44	-0.06	0.05	
17 就職する職場は、社会で高く評価される場所を選びたい	0.77	-0.22	0.07	0.10	
11 どうしても私は人より優れていたたい	0.76	0.19	-0.19	-0.06	
20 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う	0.74	-0.23	0.19	0.02	
2 ものごとは他の人よりうまくやりたい	0.73	-0.06	-0.22	0.35	
9 競争相手に負けるのはくやしい	0.72	-0.10	0.01	0.41	
13 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けないためだ	0.71	-0.03	-0.09	-0.37	
5 他人と競争して勝つとうれしい	0.67	-0.21	-0.11	0.37	
3 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい	0.13	0.87	0.00	0.15	
12 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う	0.05	0.81	0.13	0.11	
10 何でも手がけたことは最善をつくしたい	0.07	0.77	0.14	0.12	
4 人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自分を生かしたい	0.02	0.71	0.16	-0.10	
7 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う	-0.31	0.71	0.03	0.36	
14 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい	-0.34	0.59	0.06	-0.04	
23 こういうことがしたいなあと思うとワクワクする	-0.05	0.05	0.85	-0.02	自己
6 ちょっとした工夫をすることが好きだ	0.04	0.12	0.75	-0.01	工夫
19 今日一日何をしようかと考えることは楽しい	-0.17	0.07	0.73	0.27	努力
16 いろいろなことを学んで自分を深めたい	-0.11	0.11	0.61	0.18	自己 目標 努力 因子
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	-0.02	0.27	0.51	0.66	
1 いつも何か目標を持っていたい	0.03	0.22	0.12	0.70	
8 みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい	0.24	0.10	0.19	0.68	自己
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	-0.02	0.27	0.51	0.66	努力
寄 与 率 (%)	24.91	20.39	11.31	6.99	因子
累 積 寄 与 率 (%)	24.91	45.30	56.61	63.60	

夫をすることが好きだ」の負の値で構成されているため『自己努力放棄因子』とした。累積寄与率は57.3%であった。

3学年の第1因子は、「18. 成功するという事は名誉や地位を得ることだ」、「22. 世にでて成功したいと強く願っている」、「17. 就職する職場は、社会で高く評価されているところを選びたい」などで構成されているため『社会成功因子』とした。さらに、第2因子は「3.

表 5 達成動機因子負荷量表：4学年

項 目	1f	2f	3f	4f	因子名
14 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい	-0.78	0.10	0.28	0.08	自己 逃避 因子
17 就職する職場は、社会で高く評価される場所を選びたい	-0.73	0.31	0.34	0.06	
7 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う	-0.72	0.08	0.01	0.09	
19 今日一日何をしようかと考えることは楽しい	-0.60	0.19	-0.04	-0.12	
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	-0.57	0.37	-0.03	0.21	
3 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい	0.00	0.84	0.19	0.07	個性 発揮 因子
1 いつも何か目標を持っていたい	-0.26	0.81	-0.09	-0.12	
16 いろいろなことを学んで自分を深めたい	-0.19	0.65	0.03	-0.01	
10 何でも手がけたことは最善をつくしたい	-0.12	0.54	-0.38	0.49	
12 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う	-0.18	0.47	-0.15	0.34	
18 成功するという事は名誉や地位を得ることだ	0.22	0.02	0.60	-0.15	社会 地位 獲得 因子
20 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う	-0.02	0.07	0.73	0.21	
15 今の社会では強いものが出世し、勝ち抜くものだ	-0.14	-0.15	0.68	0.03	
22 世にでて成功したいと強く願っている	0.21	0.42	0.42	0.26	
5 他人と競争して勝つとうれしい	0.06	-0.07	0.21	0.76	
6 ちょっとした工夫をすることが好きだ	-0.18	0.18	-0.04	0.66	自己 工夫 最善 因子
10 何でも手がけたことは最善をつくしたい	-0.12	0.54	-0.38	0.49	
11 どうしても私は人より優れていた	0.48	0.16	0.39	0.47	
寄 与 率 (%)	18.53	17.49	8.64	8.47	
累 積 寄 与 率 (%)	18.53	36.01	44.66	53.13	

決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」,「12. 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う」,「10. 何でも手がけたことは最善をつくしたい」などで構成されているため『個性充実因子』とした。第3因子は「23. こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする」,「6. ちょっとした工夫をすることが好きだ」,「19. 今日一日何をしようかと考えることは楽しい」などで構成されているため『自己工夫努力因子』とし、第4因子は「1. いつも何か目標を持っていたい」,「8. みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」,「21. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」で構成されているため『自己目標努力因子』とした。累積寄与率は63.6%であった。

4学年の第1因子は「14. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい」,「17. 就職する職場は、社会で高く評価される場所を選びたい」,「7. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う」などで構成されているが、すべて負の値を示しているため『自己逃避因子』とし、第2因子は「3. 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」,「1. いつも何か目標を持っていたい」,「16. いろいろなことを学んで自分を深めたい」などで構成されているため『個性発揮因子』とした。第3因子は「18. 成功するという事は名誉や地位を得ることだ」,「20. 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」,「15. 今の社会では強いものが出世し、勝ち抜くものだ」などで構成されているため『社会地位獲得因子』とし、第4因子は「5. 他人と競争して勝つとうれしい」,「6. ちょっとした工夫をすることが好きだ」,「10. 何でも手がけたことは最善をつくしたい」などで構成されているため『自己工夫最善因子』とした。累積寄与率は53.1%であった。

2. 達成動機の形成を規定する要因

看護学生の達成動機の形成を規定する要因を「看護職への認識」と「看護の道を選択した理由」の2側面から検討した。

1) 「看護職への認識」と因子との関係

属性変数「看護職への認識」で最も肯定的意見が多かったのは、4学年の“看護職はやりがいのある仕事である”(91.2%)、1学年の“看護職を一生続ける”(91.1%)であった。学年ごとに多い順に第3位までを確認すると、1学年は“看護職を一生続ける”(91.1%)、“看護職はやりがいのある仕事である”(87.5%)、“高卒時の進路選択は間違っていない”(75%)の順であり、2学年は“看護職はやりがいのある仕事である”(73.2%)、“看護職を一生続ける”(69.6%)、“高卒時の進路選択は間違っていない”(53.6%)の順、3学年は“看護職はやりがいのある仕事である”(77.6%)、“看護職を一生続ける”(63.8%)、“高卒時の進路選択は間違っていない”と“看護学生としての誇りがある”が53.4%で同率であった。4学年は“看護職はやりがいのある仕事である”(91.2%)、“看護職を一生続ける”(75.4%)、“看護学生としての誇りがある”(70.2%)の順であった。

看護職に対する認識で、肯定的意見が少なかったのは“看護職は尊い仕事である”(1学年33.9%, 2学年16.1%, 3学年22.4%, 4学年14.0%, 平均21.6%)と“高校生に看護職になることを勧める”(1学年50.0%, 2学年35.7%, 3学年46.6%, 4学年52.6%, 平均46.2%)であった(図1)。

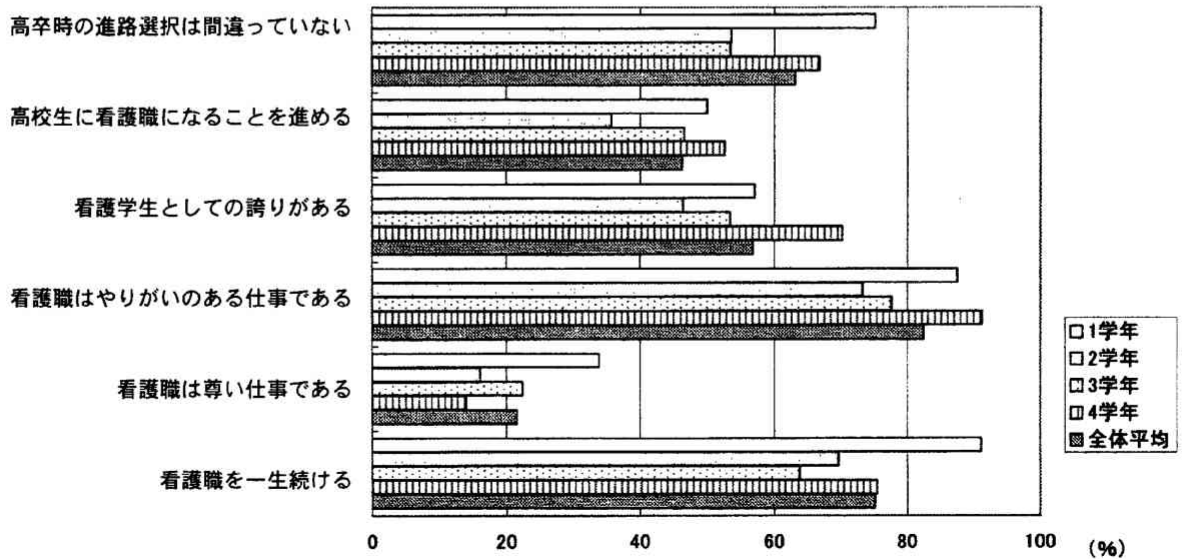


図 1 看護職への認識

「看護職への認識」から達成動機4因子の形成を規定する要因を検討すると、1学年では、第1因子の『自己努力最善因子』に対して有意差が認められたのは、“看護職はやりがいのある仕事である”と“看護職を一生続ける”の2項目であった。第2因子の『社会成功因子』に対しては“看護職は尊い仕事である”で有意差がみられ、第3因子の『没個性因子』に対しては“看護学生としての誇りがある”で有意差がみられた。第4因子の『自己楽しみ因子』に対して有意差がみられた項目はなかった(表6)。

表 6 看護職への認識からみた属性別平均：1学年

項目	回答	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
高卒時の進路選択は間違っていない	思う	0.05	-0.10	-0.08	0.03
	思わない	-0.15	0.30	0.24	-0.10
高校生に看護職になることを勧める	思う	0.19	0.18	0.16	0.26
	思わない	-0.15	-0.14	-0.11	-0.27
看護学生としての誇りがある	思う	0.04	-0.48	-0.22 *	0.10
	思わない	0.00	0.12	0.37	-0.14
看護職はやりがいのある仕事である	思う	0.14 **	0.02	0.00	-0.11
	思わない	-0.94	0.02	0.30	0.86
看護職は尊い仕事である	思う	-0.01	0.48 **	0.01	0.03
	思わない	0.04	-0.22	0.04	-0.02
看護職を一生続ける	思う	0.12 **	-0.01	0.06	-0.04
	思わない	0.00	0.44	-0.34	0.47

*p<0.05 **p<0.01

看護大学生の達成動機に関する研究

2学年では、第1因子の『社会地位評価因子』と第2因子の『自己生かし充実因子』に対して有意差が認められた項目はなく、第3因子の『平凡願望因子』に対して“高卒時の進路選択は間違っていない”で有意差があり、第4因子の『自己努力放棄因子』に対して“看護職はやりがいのある仕事である”と“看護職を一生続ける”の2項目で有意差があった(表7)。

表 7 看護職への認識からみた属性別平均：2学年

項 目	回 答	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
高卒時の進路選択は間違っていない	思う	-0.04	-0.11	-0.30 *	-0.08
	思わない	0.05	0.14	0.36	0.10
高校生に看護職になることを勧める	思う	-0.20	0.03	-0.06	-0.06
	思わない	0.11	-0.01	0.03	0.04
看護学生としての誇りがある	思う	-0.05	0.07	-0.17	-0.04
	思わない	0.04	-0.07	0.15	0.03
看護職はやりがいのある仕事である	思う	-0.03	0.03	-0.09	-0.19 **
	思わない	0.09	-0.09	0.27	0.56
看護職は尊い仕事である	思う	0.16	0.17	-0.16	0.41
	思わない	-0.03	-0.03	0.03	-0.08
看護職を一生続ける	思う	-0.04	0.04	-0.14	-0.20 *
	思わない	0.10	-0.10	0.35	0.49

*p<0.05 **p<0.01

3学年では、第1因子『社会成功因子』に対して“高卒時の進路選択は間違っていない”と“看護職を一生続ける”で有意差があり、第3因子の『自己工夫努力因子』に対して“看護職は尊い仕事である”で有意差があった。第2因子の『個性自己充実因子』と第4因子の『自己目標努力因子』に対しては有意差のある項目はなかった(表8)。

表 8 看護職への認識からみた属性別平均：3学年

項 目	回 答	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
高卒時の進路選択は間違っていない	思う	-0.29 *	0.08	0.07	0.08
	思わない	0.36	-0.11	0.05	-0.08
高校生に看護職になることを勧める	思う	0.14	-0.03	0.20	0.27
	思わない	-0.12	0.03	-0.18	-0.24
看護学生としての誇りがある	思う	-0.11	-0.17	0.20	0.13
	思わない	0.12	0.19	-0.23	-0.15
看護職はやりがいのある仕事である	思う	-0.11	0.03	0.02	0.08
	思わない	0.39	-0.11	-0.07	-0.27
看護職は尊い仕事である	思う	-0.07	-0.28	0.59 **	0.22
	思わない	0.02	0.08	-0.17	-0.06
看護職を一生続ける	思う	-0.17 **	-0.04	0.05	0.05
	思わない	0.03	0.07	-0.08	-0.10

*p<0.05 **p<0.01

4 学年では, 第 1 因子の『自己逃避因子』に対して有意差が認められた項目はなかったが, 第 2 因子の『個性発揮因子』に対して“看護職はやりがいのある仕事である”と“看護職を一生続ける”で有意差があり, 第 3 因子の『社会地位獲得因子』に対して“看護学生としての誇りがある”で有意差があった。第 4 因子の『自己工夫最善因子』に対して, “高卒時の進路選択は間違っていない”と“看護職は尊い仕事である”で有意差があった(表 9)。

表 9 看護職への認識からみた属性別平均: 4 学年

項 目	回 答	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
高卒時の進路選択は間違っていない	思う	0.01	-0.07	-0.04	0.20 *
	思わない	0.04	0.25	0.04	-0.49
高校生に看護職になることを勧める	思う	0.13	0.12	-0.02	0.00
	思わない	-0.15	-0.14	0.02	0.00
看護学生としての誇りがある	思う	-0.01	0.10	-0.21 *	0.08
	思わない	0.03	-0.25	0.52	-0.19
看護職はやりがいのある仕事である	思う	-0.04	-0.06 **	-0.06	-0.04
	思わない	0.54	0.74	0.72	0.50
看護職は尊い仕事である	思う	0.59	-0.01	-0.12	0.75 **
	思わない	-0.10	0.00	0.02	-0.13
看護職を一生続ける	思う	-0.34	0.15 *	-0.08	0.10
	思わない	0.12	-0.50	0.27	-0.32

*p<0.05 **p<0.01

2) 「看護の道を選択した理由」と因子との関係

属性変数「看護の道を選択した理由」で最も肯定的意見が多かったのは, 各学年ともに“一生役立つ知識・技術を修得する”(平均77.1%)であった。その次に肯定的意見が多かったのは“自己の興味や適性がある”(平均48.5%)や“社会へ貢献をする”(平均45.8%)であったが, これらは半数に満たなかった。看護の道を選択した理由のうち“社会的評価を得る”は少なかった(平均7.5%)(図 2)。

学年別で比較してみると, 1 学年で比較的高い割合を示しているが 4 学年で低くなっているものに“自己の興味や適性がある”(1 学年60.7%, 4 学年29.8%)と“社会へ貢献する”(1 学年46.4%, 4 学年15.8%), “社会的必要性がある”(1 学年37.5%, 4 学年21.1%)があった。逆に, 1 学年より 4 学年で高い割合を示したものに, “一生役立つ知識・技術を修得する”(1 学年73.2%, 4 学年82.5%)があった(図 2)。

「看護の道を選択した理由」から達成動機 4 因子の形成を規定する要因を検討すると, 1 学年では, 第 1 因子『自己努力最善因子』に対しては“社会へ貢献する”で有意差があり, 第 2 因子『社会成功因子』は“人間的に成長する”で有意差があり, 第 3 因子『没個性因子』では“一生役立つ知識・技術を修得する”と“人間的に成長する”で有意差があり, 第 4 因子『自己楽しみ因子』に対しては“自己の興味や適性がある”で有意差がみられた(表 10)。

看護大学生の達成動機に関する研究

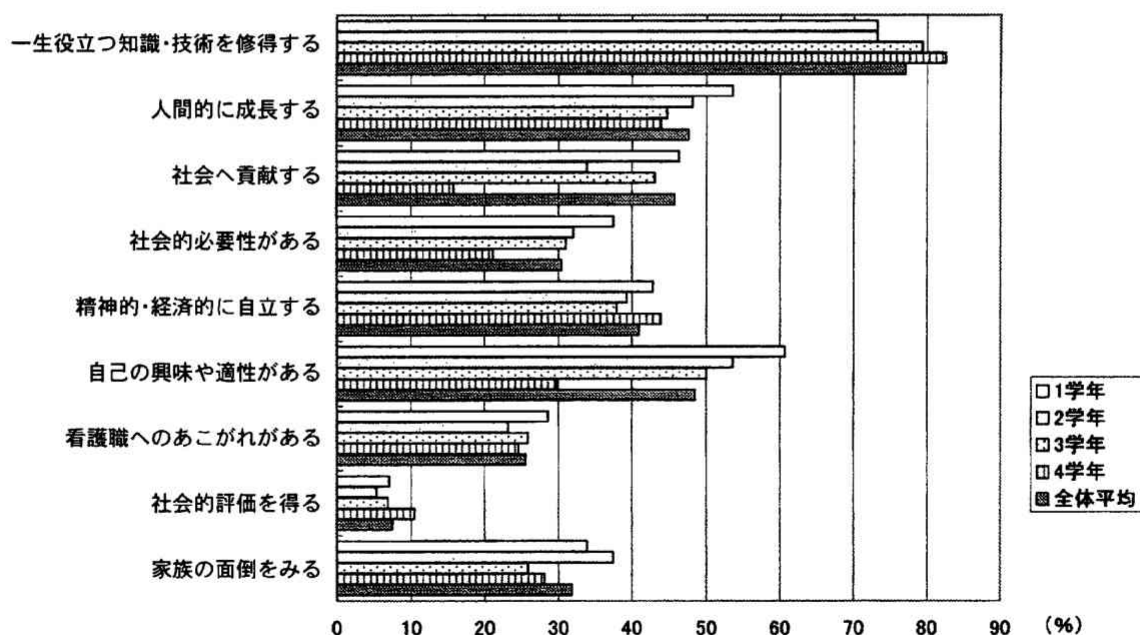


図 2 看護の道を選択した理由：2学年

表 10 看護の道を選択した理由からみた属性別平均：1学年

項目	回答	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
一生役立つ知識・技術の修得	肯定	-0.01	-0.01	-0.16 *	0.04
	否定	0.02	0.03	0.04	-0.11
人間的に成長する	肯定	0.20	-0.27 *	-0.25 *	0.09
	否定	-0.24	0.31	0.29	-0.10
社会へ貢献する	肯定	0.40 **	0.03	0.00	-0.20
	否定	-0.34	-0.02	0.00	-0.18
社会的必要性がある	肯定	0.17	-0.07	-0.12	-0.21
	否定	-0.10	0.04	0.07	0.13
精神的・経済的に自立する	肯定	0.14	-0.17	-0.28	-0.04
	否定	-0.10	0.12	0.21	0.03
自己の興味や適性がある	肯定	0.09	-0.07	0.02	0.34 **
	否定	-0.14	0.12	-0.28	-0.53
看護職へのあこがれがある	肯定	0.10	0.33	-7.00	0.54
	否定	-0.04	-0.13	0.03	-0.22
社会的評価を得る	肯定	0.65	0.51	0.11	-0.32
	否定	0.05	-0.04	-0.01	0.02
家族の面倒をみる	肯定	-0.13	-0.06	-0.10	0.23
	否定	0.07	0.03	0.05	-0.12

*p<0.05 **p<0.01

2 学年では第 1 因子の『社会地位評価因子』に対して“一生役立つ知識・技術を修得する”と“社会的評価を得る”で有意差があったが、第 2 因子以下第 4 因子まで有意差が認められた項目はなかった(表11)。

表 11 看護の道を選択した理由からみた属性別平均：2 学年

項 目	回 答	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
一生役立つ知識・技術の修得	肯定	0.09 *	0.03	0.00	0.01
	否定	-0.59	-0.18	-0.01	-0.09
人間的に成長する	肯定	-0.25	0.20	0.06	-0.17
	否定	0.24	-0.19	-0.06	0.16
社会へ貢献する	肯定	-0.22	0.28	-0.26	-0.48
	否定	0.12	-0.15	0.14	0.25
社会的必要性がある	肯定	-0.32	0.22	-0.26	-0.08
	否定	0.16	-0.10	0.13	0.04
精神的・経済的に自立する	肯定	0.16	0.13	-0.09	0.02
	否定	-0.10	-0.09	0.06	-0.01
自己の興味や適性がある	肯定	0.07	-0.06	-0.22	-0.19
	否定	-0.08	0.07	0.27	0.22
看護職へのあこがれがある	肯定	0.24	0.37	-0.29	-0.40
	否定	-0.07	-0.11	0.09	0.12
社会的評価を得る	肯定	1.37 **	-0.20	-0.26	0.34
	否定	-0.08	0.01	0.02	-0.02
家族の面倒をみる	肯定	0.23	0.32	0.02	0.15
	否定	-0.14	-0.20	-0.01	-0.09

*p<0.05 **p<0.01

3 学年では、第 1 因子『社会成功因子』に対して“人間的に成長する”と“自己の興味や適性がある”，“社会的評価を得る”で有意差があり、第 2 因子『個性自己充実因子』では“精神的・経済的に自立する”で有意差があり、第 3 因子『自己工夫努力因子』に対しては“人間的に成長する”で有意差があり、第 4 因子『自己目標努力因子』で有意差が認められた項目はなかった (表12)。

4 学年では、第 1 因子『自己逃避因子』に対して“看護職へのあこがれがある”で有意差があり、第 4 因子『自己工夫最善因子』に対して“社会的評価を得る”で有意差があった。第 2 因子『個性発揮因子』と第 3 因子『社会地位獲得因子』に対しては、有意差が認められた項目はなかった (表13)

看護大学生の達成動機に関する研究

表 12 看護の道を選択した理由からみた属性別平均：3学年

項 目	回 答	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
一生役立つ知識・技術の修得	肯定	-0.05	0.01	-0.04	-0.06
	否定	0.19	-0.03	0.16	0.22
人間的に成長する	肯定	-0.33 *	0.26	0.30 *	-0.05
	否定	0.27	-0.21	-0.24	0.04
社会へ貢献する	肯定	0.18	0.07	0.07	0.23
	否定	-0.13	-0.05	-0.05	-0.17
社会的必要性がある	肯定	0.32	0.19	-0.07	0.14
	否定	-0.14	-0.08	0.03	-0.06
精神的・経済的に自立する	肯定	0.29	0.43 **	-0.03	-0.15
	否定	-0.17	-0.26	0.02	0.09
自己の興味や適性がある	肯定	0.25 *	0.19	0.06	0.13
	否定	0.24	-0.18	-0.05	-0.12
看護職へのあこがれがある	肯定	0.14	0.08	-0.27	0.07
	否定	-0.05	-0.03	0.09	-0.03
社会的評価を得る	肯定	1.22 *	0.13	0.14	-0.05
	否定	-0.09	-0.01	-0.01	0.00
家族の面倒をみる	肯定	-0.32	0.22	0.06	-0.05
	否定	0.11	-0.08	-0.02	0.02

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表 13 看護の道を選択した理由からみた属性別平均：4学年

項 目	回 答	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
一生役立つ知識・技術の修得	肯定	0.02	-0.02	-0.08	-0.04
	否定	-0.05	-0.01	0.36	0.18
人間的に成長する	肯定	0.01	-0.08	-0.35	-0.18
	否定	-0.01	0.06	0.29	0.14
社会へ貢献する	肯定	-0.09	0.00	-0.07	-0.18
	否定	0.02	0.00	0.01	0.03
社会的必要性がある	肯定	-0.26	-0.12	0.30	-0.20
	否定	0.07	0.02	-0.08	0.05
精神的・経済的に自立する	肯定	0.10	0.00	-0.07	-0.22
	否定	-0.08	0.00	0.06	0.17
自己の興味や適性がある	肯定	-0.25	0.01	-0.20	0.29
	否定	0.10	-0.03	0.14	-0.16
看護職へのあこがれがある	肯定	-0.61 **	-0.25	-0.04	0.05
	否定	0.20	0.08	0.01	-0.02
社会的評価を得る	肯定	-0.05	0.69	0.08	0.59 **
	否定	0.04	-0.08	0.03	-0.07
家族の面倒をみる	肯定	0.01	-0.29	0.08	-0.25
	否定	-0.01	0.12	-0.03	0.10

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

Ⅲ. 考察

1. 達成動機の因子構造の学年による相違

因子構造を各学年で比較すると、1学年で第1因子に位置づいたのは、『自己努力最善因子』と命名したように、自己充実に関する因子である。2学年と3学年では、第1因子に位置づいたのは『社会地位評価因子』、『社会成功因子』と命名したように、社会的地位や評価に関する因子である。その一方、4学年は『自己逃避因子』と命名したように、自己に関する因子ではあるが負の値を示しており、達成動機としての積極的な意志は汲み取れない。4学年は第1期生であることから、先輩からの助言は得られず、何につけても自分達で開拓して行かざるを得ない立場に置かれている。最終学年を迎えたとはいえ、調査を行った時期が5月から6月にかけての時期でもあり、臨地実習はあと4週間残されており、その後の卒業研究、就職活動、そして来年2月の国家試験も控えていることから不安材料をより切実に感じ、『自己逃避因子』と命名されるような構成になったものと推察される。しかし、第2因子は『個性発揮因子』、第3因子は『社会地位獲得因子』、第4因子は『自己工夫最善因子』というように、自己の個性を大いに発揮して社会で活躍し、さらに自分なりに工夫し最善を尽くそうというはつらつとした意識があることが確認できる。

このように学年によって自己充実に関する因子、あるいは社会的地位や評価に関する因子がどの順位に位置づくかの特徴があり、各学年の教育的背景が因子構造に影響していると推察される。1学年は高校卒業後まもないことから、自己の充実を意識しているものと考えられ、努力して最善を尽くすという意識であり、2学年、3学年と学年が上がるにしたがって、社会的な地位や評価あるいは社会的成功を意識するようになってきていると推察される。そして、4学年はカリキュラムにおいても未知への挑戦という状況にあることから自己逃避の意識が前面に出たものと考えられる。

第2因子は、1学年の『社会成功因子』、2学年の『自己生かし充実因子』、3学年の『個性自己充実因子』、4学年の『個性発揮因子』というように、自己と社会を意識した因子が位置づいている。第2因子においては、社会的成功、自己生かし、自己充実、個性発揮というように、各学年ともに社会と自己、自己の個性を表明しており、看護学生の個性が表われている。このような特徴は、それぞれの学年集団が持つ特徴ではあるが、看護教育の過程を経験したことによる学年進行に伴う特徴なのかどうか、今後の横断的・縦断的検討が必要である。また、学年進行が完了し、何回かの卒業生を世に送り出せば、先輩・後輩の情報交換がより充実し、F大学の伝統が培われてくることによって、学生の心理状態はより安定してくると思われる。したがって安定した時期を迎えた時点で、再度調査及び検討を行うと、看護学生の各学年の特徴がより鮮明に構造化されるものと思われる。

さらに、F大学の昨年の調査結果と比較すると、1学年では昨年は第1因子に『自己達成懸命因子』が位置づいていたが、今年度は『自己努力最善因子』が位置づいているように、1学

看護大学生の達成動機に関する研究

年は一生懸命に頑張るという前向きな達成動機が感じとれる。2学年では、昨年は第1因子は『社会的地位獲得因子』が位置づき、今年度は『社会地位評価因子』が位置づいたことから、2学年は社会との関係を意識する時期と考えられる。3学年では、昨年は第1因子は『社会的評価意識因子』であり、今年度は『社会成功因子』である。3学年になると、社会との関係だけでなく、社会における評価を意識する特徴があると推察される。4学年は今年度初めて存在するものであるが、第1期生であり、先輩からの情報が得られないことから、不安定な状況にあることが示されている。おそらくこの不安定さは、臨地実習をやり終えたり、卒業研究が軌道に乗ったり、就職に関連した意志決定が明確になってくると弱まり、次第に心理的な安定性を取り戻せるものと考えられる。したがって、心理的安定が得られれば、達成動機は新たなものが構造化されると推察されるが、その結果は4学年のカリキュラムが終了する時期の調査結果にゆだねられる。

松永⁽²³⁾らによるとY短大の場合、1学年の第1因子は『成功期待因子』、第2因子は『自己個性への愛着因子』であり、A短大の1学年の場合、第1因子は『自我優越社交的幸福願望因子』であり、F大学の1学年の場合、第1因子『自己達成懸命因子』や『自己努力最善因子』とは異なっている。Y短大やA短大の場合、期待や願望が前面に出ているが、F大学の場合、自らの努力や最善により獲得するという意志が窺える。教育背景の異なる大学間で比較することで異なった特徴ある因子が構造化されることが確認された。1学年はこれから看護の学習が始まることから、これからの自己の努力や期待感や幸福など自己を中心とした思考過程が窺える。今後、看護学生として成長していくなかで、達成動機が社会的関係性の中で自己の課題として成長できるような教育的関与が必要と思われる。

また、因子構造で負の値で示された1学年の『没個性因子』、2学年の『平凡願望因子』、『自己努力放棄因子』、4学年の『自己逃避因子』に関しては、各学年の教育的背景を考慮し、看護学生の意識の中に、積極的な達成動機だけが存在するのではないことに関しても留意する必要がある。達成動機に対立する概念として、ホーナー (Horner, M.S)⁽²⁴⁾は、従来の達成動機理論に存在しない「成功回避動機 (the motive to avoid success)」の概念を導入している。これは達成動機を有する女性が同時に「成功への恐れ (fear of success)」をも有するというものである。ホフマン (Hoffman, L.W)⁽²⁵⁾、チャバソール (Chabassol, D.J)⁽²⁶⁾、シャピロ (Shapiro, J.P)⁽²⁷⁾らは、この傾向は男性にもみられると報告している。松永らは⁽²⁸⁾、看護学生の成功回避動機に着目し、看護学生には達成動機として、成功を回避しない (失敗回避) 学生と、成功を期待することなく他者の失敗を望む学生とが存在し、そこには勝者の敗者に対するいたわりの要因があり、看護学生には両価的構造 (ambivalent structure) が萌芽的にもたらされていることを示唆している。この成功回避の概念は和を重んじる社会の男女関係を象徴するものであるとされているが、看護教育の領域においては、女性がほぼその職責を独占し、男性と伍して役割と機能を果たし責任をもって活動することが期待されている。したがって、今後F大学に

においても、達成動機と成功回避の概念の両者から、看護学生の意識構造を明確に把握し、両価的な意識の視点から教育的な関与の方向性を見出すことが必要であることが示唆される。

2. 達成動機の形成を規定する要因

1) 「看護職への認識」と因子との関係

「看護職への認識」における因子得点からみた達成動機の形成を規定する要因をみると、1学年では第1因子『自己努力最善因子』に対して、“看護職はやりがいのある仕事である”と“看護職を一生続ける”が影響要因と考えられ、第2因子『社会成功因子』に対しては“看護職は尊い仕事である”と思っているか否かが影響要因である。これらのことから、入学間もない時期にある1学年に対しては、看護を学ぶ早い時期において、看護職のやりがいを強調するような関わりが有効と考えられる。また、第3因子『没個性因子』に対しては“看護学生としての誇りがある”の負の値を示すのが影響要因と考えられることから、看護学生の個性を伸ばすには、看護学生としての誇りを喚起するような教育的配慮が必要と思われる。

2学年では、第3因子の『平凡願望因子』に対して“高卒時の進路選択は間違っていない”と思うか否かが影響要因と考えられ、第4因子の『自己努力放棄因子』に対して“看護職はやりがいのある仕事である”あるいは“看護職を一生続ける”と思うか否かが影響要因と考えられることから、達成動機としてのマイナスイメージの意識を克服させるためには、2学年は専門科目の学習が本格的になされる時期であることから、看護という職業の価値観を形成するような教育的配慮が望まれる。3学年では、第1因子『社会成功因子』に対して“高卒時の進路選択は間違っていない”、“看護職を一生続ける”と思うか否かが影響要因であり、第3因子の『自己工夫努力因子』に対して“看護職は尊い仕事である”という認識が影響していると考えられることから、看護という職業の価値づけがなされるような教育的配慮が必要である。

4学年では、第2因子『個性発揮因子』に対して“看護職はやりがいのある仕事である”と“看護職を一生続ける”が影響要因と考えられ、第4因子『社会地位獲得因子』に対して“看護学生としての誇りがある”、第4因子『自己工夫最善因子』に対しては“高卒時の進路選択は間違っていない”と“看護職は尊い仕事である”という認識が影響していることから、看護という職業に対する認識を確認する必要があると考えられる。

これら各学年の特徴から、看護学生の達成動機を発展させるための教育的関与の方向としては、看護学生であることの誇りをより自覚させること、看護職の仕事のやりがいを意識づけること、看護の価値認識を強化させることが有効であることが示唆される。

2) 「看護の道を選択した理由」と因子との関係

「看護の道を選択した理由」における因子得点からみた達成動機の形成を規定する要因をみると、1学年では“一生役立つ知識・技術を修得する”、“人間的に成長する”、“社会へ貢献

看護大学生の達成動機に関する研究

する”，“自己の興味や適性がある”が影響要因と考えられる。2学年では“一生役立つ知識・技術を修得する”，“社会的評価を得る”の2項目が影響要因と考えられ，3学年では“人間的に成長する”，“精神的・経済的に自立する”，“自己の興味や適性がある”，“社会的評価を得る”の4項目が影響要因と考えられる。4学年では“看護職へのあこがれがある”，“社会的評価を得る”の2項目が影響要因と考えられる。これらのことから，看護職を選択した理由として①知識・技術の修得，②人間的成長，③社会への貢献，④自己の興味や適性，⑤社会的評価，⑥精神的・経済的自立，といった認識が自己充実的あるいは競争的な達成動機を形成していると推察される。

達成動機は，エンテレキーつまり「その人らしい個性的な人間にまで発展する活力」の表出(2, 27-28)であり，「自己実現への動機」である(2, 29)というように多様に捉えられている。また達成動機は，個人の積極的価値に基づく「個人的達成欲求」と社会的・文化的価値のあることを達成する「社会的達成欲求」の2側面から捉えられている(2)。しかし，どのような成功に対して自己の達成動機を表現するかは，それぞれ個々人において異なり，成功という結果のみを重視するような達成動機は、競争的達成への欲望となってしまうおそれがある(30)と指摘されていることから，達成動機に関連した教育的関与においては結果のみを重視するのではなく，過程(プロセス)を重視する必要がある。また，競争的達成動機を望ましくない動機と受け止めるのではなく，競争的達成動機の低い学生に対して教育的配慮をするとともにその意識が高い学生への支援をも考慮しなければならない。また，堀野(31)によれば，自己充実的達成動機の高い人は，他者からの援助を受け入れ，そして他者を援助したいと思ひ，失敗に対する柔軟性があり，プロセス重視の基本的学習観をもち，落ちこむことはあっても，抑うつにはなりにくいとされている。このことから，各学年の特徴を捉え，社会的な競争的達成動機と自己充実的達成動機を見極めて教育的な配慮や支援を行うような教育的関与が必要であることが示唆される。

おわりに

今回の調査から得られた達成動機の因子構造からは，各学年により特徴があり，個人の自己充実に関するものは，1学年の『自己努力最善因子』，『自己楽しみ因子』，2学年の『自己生かし因子』，3学年の『個性自己充実因子』，『自己工夫努力因子』，『自己目標努力因子』，4学年の『自己工夫最善因子』であった。社会的達成動機に関するものは，1学年の『社会成功因子』，2学年の『社会地位評価因子』，3学年の『社会成功因子』，『社会地位獲得因子』などであった。

これらの因子に対する影響要因としては，昨年調査結果と同様に，看護学生としての誇りの有無や看護婦の仕事のやりがい意識、看護婦は尊い仕事であるという看護職の価値づけと、一生役立つ知識や技術を修得すること、仕事を通して人間的に成長すること、社会へ貢献する

ことなどが有意であった。このことから、看護教育において看護学生にこれらの意識が高まるような教育的支援を行い、しかも看護を学ぶプロセスを重視するような教育的配慮が必要であることが示唆された。

今回の調査は4学年を対象として検討したが、新しい学年になった5月下旬から6月上旬の調査結果であることから、看護大学生全体の達成動機として論じることはできない。今後、学年進行が完了し、2月下旬から3月上旬のカリキュラムが終了する時期に再度追跡調査を行い、達成動機の因子構造を解明し、さらに達成動機の形成を規定する要因を検討することで学生の意識や態度を明確にし、看護教育改善のための基礎資料を得たいと考えている。

引用文献

- 1) Murray, H. A.: Explorations in Personality. Oxford University Press, 1938.
- 2) 堀野緑: 達成動機の構成因子の分析—達成動機概念の再検討, 教育心理学研究, 35, 148-154, 1987.
- 3) 堀野緑, 森和代: 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, 教育心理学研究, 39, 308-315, 1991.
- 4) 林保: 社会的動機, 講座心理学5 動機と情緒, 57-81, 1969.
- 5) 宮本美沙子: やる気の心理学, 1981.
- 6) McClelland, D.C., Atkinson, J.W. & Clark, R.A.: The achievement motive, Appleton-Century, 1953.
- 7) Atkinson, J. W.: An introduction to motivation. Van Nostrand.
- 8) Atkinson, J. W. & McClelland, D. C., : The projective expression of needs II, The effect of different intensities of hunger drive on thematic apperception, Journal of Experimental Psychology, 38, 643-658, 1948.
- 9) Atkinson, J. W. : Motivational determinants of risk-taking behavior, Psychological Review, 64, 359-372, 1957.
- 10) Bending, A. W. : Factor analytic scales of need achievement, Journal of General Psychology, 70, 59-67, 1964.
- 11) Alpert, R. & Haber, R. N. : Anxiety and academic achievement situation, J. Abnorm. Soc. Psychol, 61, 207-215, 1960.
- 12) Lowell, E. L. : The effect of need for achievement on learning and speed of performance, Journal of Psychology 55, 59-66, 1952.
- 13) 宮本美紗子, 藤原喜悦, 下山剛他: 達成動機づけ測定に関する研究の動向, 教育心理学年報, 第16集, 117-133, 1976.

看護大学生の達成動機に関する研究

- 14) 堀野緑：達成動機の心理学的考察，風間書房，1994.
- 15) 山内弘継：達成動機づけとそれに関連した行動の分析，近代文藝社，1994.
- 16) 宮本美紗子，加藤千佐子：達成動機と親和動機との関係について，日大紀要，家政学部，22，23-28，1975.
- 17) 中津達雄，倉智佐一他：達成動機 of 教育心理学的研究—文章完成法による達成動機測定 of 試み，教心，17回総会論文集，238-239，1975.
- 18) 谷口伸光：達成動機と学業成績，教心，18回総会論文集，490-491，1975.
- 19) 坂本知子，松永保子他：看護学生 of 達成動機に関する研究(1)，2 大学間 of 達成動機 of 因子構造 of 比較，足利短期大学研究紀要，19(1)，21-26，1999.
- 20) 松永保子，坂本知子，森田敏子他：看護学生 of 達成動機に関する研究(2)—2 大学間 of 意識構造 of 差，山形保健医療研究，2，73-79，1999.
- 21) 松永保子，森田敏子他：看護学生 of 成功回避動機に関する研究—その因子構造と基礎看護技術論成績との関連，教育医学，45(2)，710-717，1999.
- 22) 森田敏子，松永保子他：看護学生 of 達成動機に関する研究—因子構造とその因子を規定する要因 of 検討：3 学年 of 比較から，福井医科大学研究雑誌，1(1)，97-111. 2000.
- 23) Horner, M. S. The measurement and behavioral implication of fear of success in women. In Atkinson, J. W. & Raynor, J. O., Motivation and achievement, 91-117, Winston & Sons, Washington, D. C. 1974.
- 24) Hoffman, L. W. : Fear of success in males and females, J. Consult. Clin. Psychol., 42, 353-358, 1974.
- 25) Chabassol, D. J. : Fear of success in high school girls as related to family composition, Psychol. Rep., 42, 889-890, 1978.
- 26) Shapiro, J. P. : Fear of success : Imagery as a reaction to sex-role inappropriate behavior. J. Pers. Assess., 43, 1, 33-38, 1979.
- 27) 岡本重雄：一般心理学，東洋図書，1940.
- 28) 伊藤隆二：よく生きるということ，柏樹新書，1977.
- 29) 宮本美紗子：やる気 of 心理学，創元社，1981.
- 30) 佐伯胖：学力と思考，教育学大全集，第一法規，1982.
- 31) 堀野緑：前掲書14，161.